

柿の炭疽病の生態と防除法

平成20年9月18日

県北農林事務所伊達農業普及所

JA 伊達みらいあんぼ柿生産部会梁川支部

【炭疽病の特徴】

新梢や果実に発病する。5月上中旬頃から枝に発病し、黒褐色長楕円形の病斑があらわれ、病斑部は窪み、さらに鮭肉色の孢子塊を生じ、雨滴によって飛散伝染する。果実では6月末から7月と9～10月中に雨が多いと発病し、黒く窪んだ病斑があらわれ、多くは落果する。



写1 果実病斑



写2 発病枝

病斑の発育温度は9～36
最適温度は25～30

病斑部に水分があると、孢子は
20～27 で多量に形成される。

【発生経過】

- 1 伝染源：主に枝の病斑部。また、落葉跡、芽などにも病原菌が潜在して越冬する。
- 2 伝染方法：病斑状に形成された分生子が雨水の飛沫とともに飛散し、枝梢や果実などに達し、角皮から侵入して感染する。新しい病斑上には分生子が形成され、これが飛散して伝染を繰り返す。台風など特殊条件を除けば比較的近くに飛散することが多い。
- 3 好適条件：降雨が長く続く年ほど発生が多い。5～6月の降雨は新梢や幼果の発病を増し、9～11月の降雨は果実の被害を激しくする。排水、通風の悪い園、密植園では被害を受けやすい。また、徒長枝の発生が多くなるような栽培管理下で発生が多く、被害が大きくなる。

【対策と防除法】

1 耕種的対策

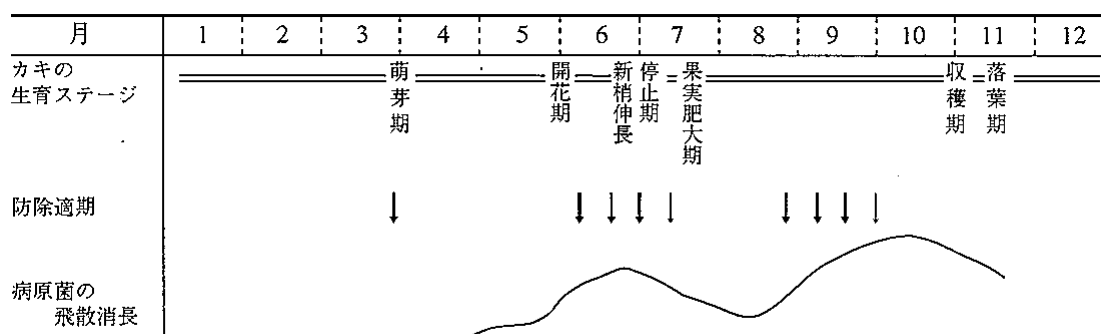
- 冬期せん定時に、病斑部の枝をできるだけ切除する。
- 軟弱枝や徒長枝に感染しやすいので、優先的に切除し適切に処分する。
- 樹高を下げ、葉液の透過を良くする。
- 密植園は間伐するなど、園内の通風採光条件を改善する。
- 排水不良園では排水対策を徹底する。
- 多肥栽培（窒素過剰）を避ける。
- 有機物を多くし、石灰や苦土石灰もあわせて施す。

2 薬剤防除

- 発生消長に基づく適期防除の励行。
- 生育期の薬剤防除の徹底を図る。
- 有効な薬剤の採用と防除暦の再検討

表1 炭疽病に登録のある薬剤

薬剤名	使用濃度	収穫前日数	備考
トップジン M 水和剤	1,000 ~ 1,500 倍	前日	
ベンレート水和剤	2,000 倍	7 日前	
スパットサイド水和剤	2,000 ~ 3,000 倍	14 日前	
ベルコート水和剤	1,000 ~ 1,500 倍	14 日前	効果弱い
ストロビードライフフロアブル	3,000 倍	14 日前	
ストライド顆粒水和剤	3,000 倍	14 日前	
サニパー	600 ~ 800 倍	21 日前	
チオノックフロアブル	500 倍	30 日前	
ジマンダイセン水和剤	400 ~ 800 倍	45 日前	
パルノックスフロアブル	500 倍	60 日前	



生育ステージは地域および品種で多少異なる場合がある ↓ : 重点防除期

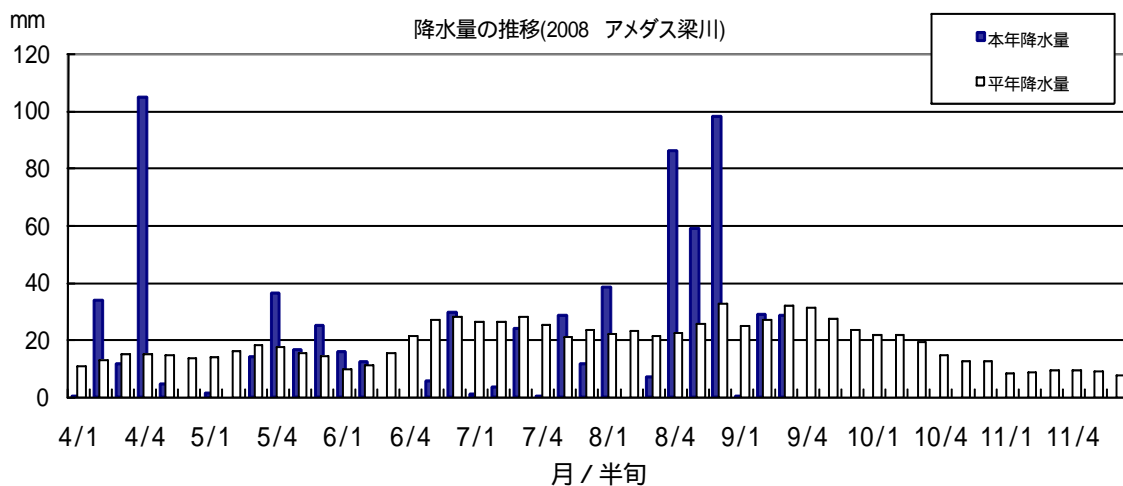
図1 発生消長と防除時期

- 参考資料 -

【現地の状況】

1 今年の気象と発生要因

5月下旬～6月上旬の降雨による園地湿度の高まりによる分生子の飛散
8月16日以降の曇天多雨による感染拡大



2 被害発生状況



写3 発病果の落果状況



写4 蜂屋柿の落果



写5 平核無柿の発病果



写6 蜂屋柿の発病果